

# 令和7（2025）年度4月「歳時記」

令和7（2025）年度最初の歳時記です。今年度は、小学校や中学校で学習する古典作品を掲載していきます。おとなの方はもちろん、小学生、中学生、高校生の皆さんにも是非古典に親しんでほしいと思います。

## <古文>

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

## <現代語（口語）訳>

春は夜明け（に）趣がある。だんだん白んでいく山際の空が少し明るくなつて、紫がかった雲が細くたなびいている（のが）趣がある。

夏は夜（に 趣 がある）。月の出ているころは言うまでもなく、闇夜でもやはり、たくさんの 螢 が入り乱れて飛んでいるのは（趣 がある）。また、ほんの 一つ二つだけ、かすかな 光 を放って飛んでいくのも 趣 がある。雨などが降るのも 趣 がある。

秋は夕暮れ（に 趣 がある）。夕日が照って、山の端にとても近くなっていったとき、鳥がねぐらへ行こうとして、三羽四羽あるいは二羽三羽と、急いで飛んでいく 姿 まで、しみじみとした 気持ち になる。まして、雁などが連なって飛んでいくのが、とても 小さく 見えるのはとても 趣 がある。日が沈みきって、風の音や虫の音など（が聞こえるのは）、またいうまでもなく 趣 がある。

冬は早朝（に 趣 がある）。雪が降ったのはいうまでもない、霜がとても 白い ときも、またそうでもなくてもとても 寒い ときに、火などを急いでおこして、炭を持って（廊下を）渡っていくのも、とても 似 つかわしい。昼になって、寒さが 緩 んでいくと、火鉢の火も 白い 灰ばかりになってよくない。

清少納言作「枕草子」第一段です。季節をテーマとした最初の文章で、余情に富んでいます。美しい情景を時刻を変えて切り取り、映像的に表現しています。

枕草子は「をかし」の文学と言われます。第一段では、「をかし」とともに「あはれ」という心の動きを表す言葉が使われています。

<注> 「<sup>お</sup>をかし」…<sup>あか</sup>明るく<sup>はな</sup>華やかな<sup>じょうしゆ</sup>情趣・<sup>び</sup>美への<sup>あこが</sup>憧れ 訳 <sup>おもむき</sup>趣がある  
「<sup>わ</sup>あはれ」…<sup>ふか</sup>深い<sup>かんと</sup>感動 訳 <sup>しみ</sup>しみじみとした<sup>きも</sup>気持ちになる

また、この段では、「<sup>だん</sup>春はあけぼの。」「<sup>はる</sup>夏は夜。」「<sup>なつ</sup>秋は夕暮れ。」「<sup>あき</sup>冬はつと  
めて。」と体言止めで<sup>じゆつご</sup>述語が<sup>しょうりやく</sup>省略されています。ここでは、「<sup>お</sup>をかし」が  
<sup>しょうりやく</sup>省略されていると<sup>かいしゃく</sup>解釈し、「<sup>おもむき</sup>趣がある」を加えて<sup>くわ</sup>口語訳をしています。

<sup>せいしょうなごん</sup>清少納言の<sup>かくきせつ</sup>各季節の<sup>さいこう</sup>最高のシーンはこのようなものですが、<sup>みな</sup>皆さんの<sup>きせつかん</sup>季節感  
はどのようなものでしょうか。<sup>あき</sup>安芸<sup>おおたちょう</sup>太田町の<sup>ひょうげん</sup>シーズンベストを<sup>ひょうげん</sup>表現するのも  
<sup>おもしろ</sup>面白く、「<sup>はってんかのう</sup>発展可能な<sup>まち</sup>町づくり」につながるのかもしれませんが、<sup>みな</sup>皆さん、<sup>よ</sup>良い  
<sup>さくひん</sup>作品ができましたら、<sup>しょうかい</sup>ご紹介いただけると<sup>さいわ</sup>幸いです。

<sup>あき</sup>安芸<sup>おおたちょう</sup>太田町<sup>きょういくいいんかい</sup>教育委員会 <sup>きょういくちょう</sup>教育長 <sup>おおの</sup>大野 <sup>まさと</sup>正人

令和7（2025）年度5月「歳時記」

今月は中学校1年生の教科書にある「竹取物語」です。昔話でもなじみが深い「かぐや姫」の物語です。

<古文>

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よるづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむ言ひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。

<現代語（口語）訳>

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野山に分け入って竹を取っては、いろいろなことに使っていた。名前をさぬきの造と言った。

その竹の中に根本が光る竹が一本あった。不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの人がまことにかわいらしい様子で座っていた。

「竹取物語」は作者不明ですが、平安時代の910年以前に成立したと考えられています。紫式部が「源氏物語」の中で「物語の出で来はじめの祖」としているように、仮名で書かれた日本最古の物語で、人間の真の姿が描かれています。

今回は冒頭の部分です。子どもは翁と媼によって大切に育てられ、たった三か月ほどで輝くばかりに美しい大人に成長しました。その評判を聞いて、多

くの人<sup>ひと</sup>が求婚<sup>きゅうこん</sup>します。かぐや姫<sup>ひめ</sup>は、なかでも熱心<sup>ねっしん</sup>な五人<sup>ごにん</sup>の貴公子<sup>きこうし</sup>の求婚<sup>きゅうこん</sup>を断<sup>ことわ</sup>り切れず、望<sup>のぞ</sup>みの品<sup>しな</sup>を持<sup>も</sup>ってきた人<sup>ひと</sup>と結婚<sup>けっこん</sup>すると、それぞれに難題<sup>なんだい</sup>を出<sup>だ</sup>しました。五人<sup>ごにん</sup>の求婚<sup>きゅうこん</sup>者<sup>しゃ</sup>たちは、知恵<sup>ちえ</sup>や財産<sup>ざいさん</sup>を投<sup>とう</sup>じて難題<sup>なんだい</sup>に挑<sup>いど</sup>みます。続<sup>つづ</sup>きは次回<sup>じかい</sup>に掲載<sup>けいさい</sup>します。

今回<sup>こんかい</sup>から練習<sup>れんしゅう</sup>問題<sup>もんだい</sup>を付<sup>つ</sup>けます。中<sup>ちゅう</sup>学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>・高<sup>こう</sup>校<sup>こう</sup>生<sup>せい</sup>を始<sup>みな</sup>め、皆<sup>みな</sup>さんぜひチャレン<sup>ジ</sup>してみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 波下線部<sup>なみかせんぶ</sup>「いふ」「よろづ」「あたり」を現代仮名遣い<sup>げんだいかなづか</sup>に直<sup>なお</sup>して書<sup>か</sup>きましょう。
- 2 波下線部<sup>なみかせんぶ</sup>「あやしがりて」の理由<sup>りゆう</sup>を書<sup>か</sup>きましょう。
- 3 波下線部<sup>なみかせんぶ</sup>「それ」が指<sup>さ</sup>しているものを、古文<sup>こぶん</sup>から三字<sup>さんじ</sup>で見<sup>み</sup>つけて書<sup>か</sup>きましょう。

<解答例>

- 1 いう よろず いたり
- 2 根元の光る竹が一本あったから
- 3 筒の中

## 令和7（2025）年度6月「歳時記」

つゆほんばん、しっとりとした風情に包まれる6月。雨は大地を潤し、紫陽花や新緑が美しく彩りを添えます。雨音に耳を澄ませれば、季節の移ろいや命の躍動を感じ、心が静かに和みます。また、夏の到来を予感させる風情も味わえます。自然と文化が交わる、風情豊かな時節です。

今月は「竹取物語」の2回目、5人の貴公子のうちの「くらもちの皇子」についてのお話です。6月の紫陽花にも勝る「蓬萊の玉の枝」を課されたくらもちの皇子は、にせの玉の枝を持って翁の家を訪れ、これまたうその冒険談を語ります。

### <古文>

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり見歩く、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鉢を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、舟より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るにさらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木ども立てり。

その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

<現代語（口語）訳>

これこそ私が探し求めていた山だろうと思って、やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、見て回っていると、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀を持って、水を飲んで歩きます。これを見て、舟から下りて、「この山の名は何というのですか。」と尋ねます。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言います。これを聞いてうれしくてたまりません。

その山は、見ると全く登りようがありません。その山の斜面の裾を回ってみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出ていました。その流れには、色とりどりの玉でできた橋が架けられています。その付近に、光り輝く木々が立っています。

その中で、ここに取ってまいりましたのは、たいそう見劣りするものですが、おっしゃったものと違ってはと思い、この花を折ってきました。

くらのちの皇子に課せられた難題は「蓬萊の玉の枝」です。蓬萊は古代中国の伝説の島で、そこには根が銀、茎が金、実が真珠でできた木が生えていると伝えられていました。策略にたけたくらのちの皇子は、蓬萊山に出かけたふりをして、人目につかないように家に閉じこもります。そして、職人たちに玉の枝を作らせ、3年後、今帰国したかのように見せかけてかぐや姫を訪ねます。そこで語ったのがここで取り上げた冒険談です。

冒険談を聞き、玉の枝を本物に違いないと思ったかぐや姫が意気消沈しているところに、職人たちが褒美を求めてやってきます。その言い分を聞いたかぐや姫は、職人たちに褒美を与えるとともに玉の枝を皇子に返します。きまりが

わるわくなったなったつ皇子みこは、日ひが暮くれるとこっそりぬ抜だけ出だしていきました。

このように5人のにん貴公子きこうしたちはそれぞれなんだい難題かを課かされ、知恵ちえや財産ざいさんを投とうじてなんだい難題いどに挑いどみましたが、誰だれ一人ひとりとしてかぐや姫ひめの望のぞみの品しなを持ち帰もることはできかえませんでした。

この後あと物もの語がたりは、帝みかどの求きゅう婚こん、かぐや姫ひめの昇しょう天てんと進すすんでいきます。

最後に、れんしゅうもんだい練習問題みなです。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

1 なみかせんぶ波下線部「よそほひ」「やう」「まうで」を現代仮名遣いに直して書きま  
しょう。

2 なみかせんぶ波下線部「くみ歩く」「問ふ」は誰の動作ですか。次から選んで書きま  
しょう。

( おきな翁 おんな女 かぐやひめかぐや姫 くらもちのみこくらもちの皇子 )

3 なみかせんぶ波下線部「うれしきことかぎりなし」とありますが、それはなぜですか。  
20字以内で書きましよう。

かいどうれい  
<解答例>

1 よそおい ・ よう ・ もうで

2 おんな女 ・ くらもちのみこくらもちの皇子

3 <例> れい探 さがし もと求 ほうらいめていた蓬萊の山 やまに着 ついたから

## 令和7（2025）年度7月「歳時記」

暑中お見舞い申し上げます。燦然と輝く日差しと蝉の声が夏の情景を織り成します。突如の夕立が畑を潤し、涼風が頬を和らげるひとときに、心に静かな潤いが広がります。7月は、夢と情熱が心に満ちあふれる季節です。皆さんには暑さの中でも健やかに、笑顔あふれる日々をお過ごしくださいますよう、心からお祈りいたします。

今月は「竹取物語」の最終回です。いよいよかぐや姫は、当時の人々にとっては「夢」の世界、月に帰っていきます。

### <古文>

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山を「富士の山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝えたる。

### <現代語（口語）訳>

さっと天の羽衣を着せて差しあげると、翁のことを、気の毒だ、不憫だ、とお思いになっていた気持ちも、消えてしまった。この衣を着た人は、物思いがなくなってしまうので、そのまま飛び車に乗って、百人ほどの天人を引き連れて、昇ってしまう。

お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようと、ご命令になった。その旨を承って、兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということ

とから、その山を「富士の山」と名づけたのである。その煙は、いまだ雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられている。

「竹取物語」は、民間に伝わる伝説や民話、さらに中国、インドの話などをと、情愛を織り込んだお話です。全編を通して、美しいものや未知の世界に対するあこがれやおそれといった昔の人々の思いが表現されています。また、一方で、人間のみにくさも描かれています。そして、月へ帰る運命の姫の悲しみ、翁の嘆き、帝の失望。これらは、この作品が「人間味あふれる愛の物語」であることを示しています。私はホームページで紹介するにあたり、全文を古文でおさらいしています。皆さんも、月を愛でながら「かぐや姫の物語」の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 波下線部「いとほし」「たまふ」「うけたまはりて」を現代仮名遣いに直して書きましょう。
- 2 波下線部「物思ひ」とありますが、具体的にはどのような気持ちですか。25字以内で書きましょう。
- 3 波下線部「その山」が「富士の山」と名づけられたのは、なぜですか。20字以内で書きましょう。

かいとうれい  
< 解答例 >

- 1 いとおし ・ たもう ・ うけたまわりて
- 2 <例> 翁を気の毒だ、不憫だとお思いになる気持ち。
- 3 <例> たくさんの兵士が登った山だから。

# 令和7（2025）年度8月「歳時記」

8月はまさに盛夏。蝉の声が暑さを告げ、青空に浮かぶ雲が季節を彩ります。暑さで有名な加計では県内最高気温をしばしば記録します。それでも、夕方になると涼風が頬を撫で、夏祭や花火大会などの催しと共に、稲の実りやお盆などの行事が人々の心を潤します。人々の知恵と自然の営みが共鳴し、一瞬の情景に古今の響きが重なり、夏の終わりを予感させます。

今月は、漢文を取り上げます。漢文ですから元は漢字ばかりで書かれた文章ですが、ここでは中学校1年生の教科書に従って「書き下し文」で表記しています。

## <書き下し文>

楚人に、盾と矛とを鬻ぐ者有り。

之を誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、能く陷すもの莫きなり。」と。

又、其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利なること、物に於いて陷さざる無きなり。」と。

或るひと曰はく、「子の矛を以て、子の盾を陷さば何如。」と。

其の人、応ふること能はざるなり。

## <現代語訳>

楚の国の人で、盾と矛を売る者がいた。

盾をほめて、「私の盾の堅いことといったら、つき通せるものはない。」と言った。

また、矛をほめて、「私の矛の鋭いことといったら、どんなものでも突き通せないものはない。」と言った。

ある人が、「あなたの矛で、あなたの盾を突き通すとどうなるのかね。」と尋ねた。

その人は答えることができなかったのである。

となり くに ちゅうごく せんごくじだい さくひん かんぴし しゅってん しょうにん  
お隣の国、中国の戦国時代の作品「韓非子」からの出典です。ある商人が  
「どんな矛でも防げる」と宣伝しつつ「どんな盾でも突き通せる」とも自信たっ  
ぷりに話し、客が「その矛でこの盾を突いたらどうなるか」と問うと答えられ  
なかったことから、一方が正しければ他方が誤りになることが「矛盾」と呼ば  
れるようになりました。現代では、意見や行動、文章の前提と結論が合わない  
ばあい もち  
場合に用いられています。

はな あ ぶんしょう むじゆん み れんしゅう ろんりてき  
話し合いや文章のなかで矛盾を見つける練習をすることで、より論理的に  
かんが ちから み しょう ちゅうがくせい こうこうせい みな がっこう じゅぎょう にちじょう  
考える力が身につきます。小・中学生、高校生の皆さん、学校の授業や日常  
せいかつ き えんりょ むじゆん してき  
生活で気づいたら遠慮せずに「矛盾」を指摘してみましよう。

むじゆん ちゅうごく むかしはなし れきしじょう できごと じんぶつ げんどう う  
「矛盾」のように、中国の昔話や歴史上の出来事、人物の言動から生まれ  
たことばを故事成語とといいます。たとえば「一石二鳥」は一つの行動で二つの  
こじせいご ひとつにちよう ひと こうどう ふた  
利益を得る意味です。「画竜点睛」は、絵の竜に目を入れて完成させる故事から、  
りえき え い み がりようてんせい え りゅう め い かんせい こじ  
大事な仕上げや肝心な部分を表します。故事成語は短いことばで深い物語を  
だいじ し あ かんじん ぶぶん あらわ こじせいご みじか ふか ものがたり  
伝えられるのが魅力です。作文やスピーチで使うと説得力や表現の幅が広が  
つた みりょく さくぶん つか せつとくりょく ひょうげん はば ひろ  
ります。

しょう ちゅうがくせい こうこうせい みな おお こじせいご ふ ばめん  
小・中学生、高校生の皆さんには多くの「故事成語」に触れ、いろいろな場  
せっきよくてき つか おち  
面で積極的に使ってほしいと思います。

れんしゅうもんたい みな  
それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんたい  
\* 練習問題

- なみかせんぶ り ばあい り おな い み  
1 波下線部「利なること」とありますが、この場合の「利」と同じ意味で  
「利」が使われている熟語を次から選んで書きましよう。  
( えいり えいり りえき りりつ )  
鋭利 営利 利益 利率
- なみかせんぶ し い み げんたいごやく なか じ め  
2 波下線部「子」とは、どんな意味ですか。現代語訳の中から3字で抜き  
だして書きましよう。
- なみかせんぶ ひと こた  
3 波下線部「その人は答えることができなかった」のは、なぜですか。  
30字以内で書きましよう。

かいどうれい  
<解答例>

1 えいり  
鋭利

2 あなた

3 <例> れい じぶん はなし あ てん ひと してき  
<例> 自分の話のつじつまが合わない点を、ある人に指摘されたから。

あ き おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人

令和7（2025）年度9月「歳時記」

川と森の里、安芸太田に初秋の涼風が渡る9月。彼岸花が真紅の絨毯を描き、田では稲穂が頭を垂れ黄金色に輝きます。秋風に揺れる秋桜も美しい季節です。中秋の名月の夜には、団子や秋の果実を供え、ほんのりとした光に心を潤すことができます。彼岸を過ぎれば、野山は色づき始め、静かに秋が深まります。秋の夜長、本を傍らにゆったりと過去と未来に思いを馳せる時間が流れます。

そこで、今月は、秋の夜長、過去と未来を思う一時をとということで、「平家物語」と「徒然草」の冒頭を取り上げます。いずれも、中学校2年生の学習内容です。

1 平家物語（冒頭）

<古文>

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

<口語（現代語）訳>

祇園精舎の鐘の音には、全てのものは移り変わり同じ状態ではないことを伝える響きがある。沙羅双樹の花の色は、栄える者の必ず滅びゆく道理を表す。権力におごる人も長くは続かず、春の夢のようにはかない。武力ある者もまた、つひには消えうせること、ひとへに風に吹き飛ぶ塵のようなものだ。

2 徒然草（序段）

<古文>

つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

<口語（現代語）訳>

することがなく退屈であるのに任せて、一日中、硯に向かいながら、次々と浮かんでは消えていく、とりとめもないことを、何というあてもなく書きつけていると、妙に心騒ぎがすることである。

「平家物語」は、平家一門の興亡のありさまを語った軍記物語です。成立は鎌倉時代の始めで、作者は信濃前司行長といわれますが、はっきりしていません。漢語を巧みに交えた文章には独特の調子とリズムがあり、琵琶法師の語る「平曲（平家琵琶）」として広く民衆に親しまれました。

「徒然草」は、鎌倉時代の末に、兼好法師によって書かれた、「枕草子」と並び日本の代表的な随筆文学です。自然や人間についての鋭い考えや感想、見聞が書きつづられ、無常観に基づく人生観や美意識が読み取れます。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 波下線部「盛者必衰」と同じ内容を表している部分を、これより後の古文中から二つ抜き出しましょう。
  - 波下線部「春の夜の夢」と同じように、はかないもののたとえとして使われている言葉を、古文中から抜き出しましょう。
  - 波下線部「そこはかたなく書きつづれば」とありますが、何を書きつけているのですか。古文中から抜き出しましょう。
  - 徒然草序段で、作者はどのようなことを述べていますか。次の空欄に入る言葉を下から選んで書きましょう。  
「徒然草」を書いている時の（ ）。
- じょうきょう しんじょう もくてき てんぼう はんせいてん かいせつ  
状況と心情 目的と展望 反省点と解説

かいとうれい  
< 解答例 >

- おごれる人も久しからず たけき者もつひには滅びぬ
- 風の前の塵
- 心にうつりゆくよしなし事
- 状況と心情

令和7（2025）年度10月「歳時記」

あきかぜ　やまやま　こうよう　あか　かなづき　ふる　かみありつき　よ  
秋風がそよぎ、山々の紅葉が深まる「神無月」。古くから「神有月」とも呼ば  
れ、やおよす　かみがみ　いすも　つと　しんわ　おもむき　つた　かぜ　ゆ  
れ、枯れ葉が舞い、朝露が葉縁を彩ります。十六夜の月見には団子や芋を供え、  
か　は　ま　あさつゆ　はえん　いろど　いざよい　つきみ　だんご　いも　そな  
静かな満月を愛でる風習も残ります。うんどうかい　たいかい　かくち　ひら  
スポーツの秋を満喫する人々の笑顔が弾けます。ぶんかさい　がくしゅうはっぴょうかい　にぎ  
い、お店には栗や松茸、鮭など秋の味覚が並び、しゅうかくいち　かつき　あさきり  
が立ち込める早朝は幻想的で、川面には柔らかなベールがかかります。深まる  
あき　じょうしゆ　あじ　きせつ　うつ　こころ　よ　が　つ  
秋の情趣を味わい、季節の移ろいに心を寄せる10月です。

こんげつ　きせつ　うつ　こころ　よ　まくらのそうし　だいいちだん　と  
今月は、季節の移ろいに心を寄せるということで、「枕草子」の第一段を取  
りあ　せんげつ　ひ　つづ　ちゅうがっこう　ねんせい　がくしゅうないよう  
り上げます。先月に引き続き、中学校2年生の学習内容です。

古文

はる　よう　よう　しろ　やま　わ　むらさき  
春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる  
くも  
雲のほそくたなびきたる。

なつ　よる　つき　このころは　さらなり　やみ　お　ほたる　おお　と　い  
夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、  
ただ　ひと　ふた　など、ほのかに　うち　ひかり　て　い　行く　も　お　かし　あめ　など　ふ　る　も　お　かし。

あき　ゆう　く　ゆう　ひ　やま　は　ちこ　からす　ね　い  
秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行く  
とて、みつ　よ　ふた　み　ひ　え　わ　かり  
とて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつ  
らねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音な  
ど、はた　い　う　べ　きに　あ　らず。

ふゆ　ゆき　ふ　い　う　べ　きに　も　あ　らず　しも　しろ  
冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさ  
らでもいと寒きに、火などいそぎおこして、すみ　わた　る　も　い　と　つき　づ　き　し　ひる  
なりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

口語（現代語訳）

はる　あ　が　た　しら　やま　すこ　あか　むらさき  
春は明け方。だんだんと白んでいく山ぎわが、少し明るくなって、紫がかっ  
くも　ほそ  
た雲が細くたなびいている（のは風情がある）。

なつ　よる　つき　この　い　やみ　ほたる　おお　と  
夏は夜。月の頃は言うまでもないが、闇もやはり、蛍が多く飛びかっている

(のがよい)。また、ほんの一、二匹ほのかに光って飛んでいくのも 趣 がある。

雨などが降るのもいい。

秋は夕暮れ。夕日が差して山の端にとても近づいた頃に、鳥がねぐらへ行くというので、三、四羽、二、三羽など飛び急ぐことまでもしみじみとしたものを感じさせる。まして、雁などが列を作っているのが、たいそう小さく見えるのはたいへんおもしろい。日がすっかりしずんでしまって、風の音、虫の音など(がするもの)、これもまた、言いようもない(ほど趣 深い)。

冬は早朝。雪が降っているのは、言うまでもない。霜が真っ白なものも、またそうでなくても、たいそう寒いときに、火などを急いでおこして、炭を持って(廊下などを)通っていくのも、たいへん似つかわしい。昼になって、だんだん暖かくなって(寒さが)ゆるんでいくと、火桶の火が白い灰ばかりになって、好ましくない。

「枕草子」は、平安時代に清少納言によって書かれた、日本を代表する随筆文学です。作者が宮仕えをしていた頃に見聞きしたことや、季節の感想、人生観などが、独自のするどい感覚と簡潔な文章で表現されています。

何度も音読して味わうとともに、あなたが感じる四季の 趣 をまとめてみるのもおもしろいでしょう。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 波下線部「春はあけぼの」とありますが、作者は春の明け方をどうであると思っているでしょう。古文中から三字で抜き出しましょう。
- 2 波下線部「月のころはさらなり」とありますが、「月のころ」と対比されている言葉を、古文中から一字で抜き出しましょう。
- 3 秋の段では、季節を捉える作者の感覚はどのように変化しているでしょう。次から選んで書きましょう。

しかくから ちょうかく しかくから みかく ちょうかくから しかく みかくから ちょうかく  
視覚から聴覚 視覚から味覚 聴覚から視覚 味覚から聴覚

4 波下線部「わろし」とありますが、作者はどのような様子を「わろし」と  
思っているでしょう。次の空欄に言葉を書き入れましょう。

( ) の火が白い ( ) ばかりになっている様子。

<解答例>

1 お  
をかし

2 やみ  
闇

3 しかく ちょうかく  
視覚から聴覚

4 ひおけ はい  
火桶 灰

あ き おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人

令和7（2025）年度11月「歳時記」

11月は秋が深まり、冬の気配も感じられる季節です。古くから「霜月」と呼ばれ、朝夕に霜が降り始めます。紅葉は見頃を迎え、三段峡や龍頭峡、深山峡、筒賀の大イチョウなど、安芸太田町のあちらこちらで赤や黄の風景を楽しむことができます。空気が澄むので、散歩をしながら色づく木々を観察するのもおすすめです。まさに、行楽シーズン真っ直中です。

また、実りの季節でもあり、柿や栗、松茸といった秋の味覚が店先に並びます。肌寒さの中で温かい鍋料理や焼き芋を食べると、体も心もほっと温まります。冬に渡る野鳥の群れを見かけるようになるのも、この時期の自然の変化です。

今月は行楽シーズンということで、私の愛読書「徒然草」から、お出かけを題材にした第52段を選びました。先月までに続き、中学校2年生の学習内容です。

<古文>

仁和寺にある法師、年寄るまで岩清水を拝まざりければ、心うく覚へて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。

<口語（現代語訳）>

仁和寺にいる法師が、歳を取るまで岩清水八幡宮を参拝に行ったことがなかったのも、残念なことに思われて、ある時に思い立って、たった一人で徒歩で

参詣した。極楽寺や高良神社などを参拝して、これだけのものと思い込んで帰っ

てきた。

さて、仲間に向かって、「長年の間、思っていたことを果たしてきました。うわさに聞いたのよりも勝って、尊いものでした。それにしても、参拝している人がそれぞれ山に登っていたのは、何事があったのだろうか、と知りたかったけれど、神に参拝するのが本来の目的だと思って、山までは見ませんでした。」と言った。

少しのことにも、その道の先導者があってほしいものである。

鎌倉時代の末に、兼好法師によって書かれた「徒然草」は、「枕草子」と並ぶ日本の代表的な随筆文学です。自然や人間についての鋭い考えや感想、見聞が書きつづられ、無常観に基づく人生観や美意識が読み取れます。第52段について、読み取った内容を自分の経験と結び付けながら、兼好法師のもの見方について考えていくのも面白いのではないのでしょうか。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 波下線部「年ごろ思ひつること」とは、どのようなことでしょうか。現代語で書きましよう。
- 2 波下線部「尊くこそおはしけれ」に用いられている表現について、次の空欄に当てはまる言葉を書きましよう。  
この部分は「こそ」という(①)があることで、文末の「(②)」が「けれ」に変化している。このような古典の表現を(③)といい、ここでは「尊く」という語が強調されている。
- 3 波下線部「何事かありけん」とありますが、何を見てこう思ったのでしょうか。古文中から十三字で見つけましよう。
- 4 波下線部「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」とありますが、ここではどのようなことを言っているのでしょうか。五十字以内でまとめましよう。

かいどうれい  
<解答例>

- 1 いわしみ すはちまんぐう さんばい  
石清水八幡宮に参拝すること。
- 2 ①じよし ②けり ③かか むす  
①助詞 ②けり ③係り結び
- 3 まい ひと やま のぼ  
参りたる人ごとに山へ登りし
- 4 ほんの ちい さな こと であつても、その 道 の せんどうしゃ となる ひと がいてくれれば、しっぱい  
ほんの小さなことであっても、その道の先導者となる人がいてくれれば、失敗しないですむということ。

あ き おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人

# 令和7（2025）年度12月「歳時記」

12月は「師走」とも呼ばれ、年の瀬の慌ただしさとともに、さまざまな風物詩が日本の暮らしを彩ります。街は華やかなイルミネーションに包まれ、クリスマスや忘年会といった行事が季節の移ろいを感じさせます。

「大掃除」もまた、年末の重要な行事の一つです。古くは「煤払い」と呼ばれ、神仏を迎えるための宗教的な意味合いがありました。現代でも、家中を丁寧に掃除し、心身を整えて新年を迎える準備をする風習として根付いています。

こうした風物詩の数々は、忙しさの中にも日本人の美意識や感謝の心を映し出し、年の終わりにふさわしい静かな感動をもたらしてくれます。

今月は、年の暮れに慌ただしく旅支度を整えていく自らの姿を著している「おくのほそ道」の冒頭を取り上げました。中学校2年生の学習内容です。

## <古文>

月日は百代の過客にして、行きかゝ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心くるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風の別荘に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

おもてはつくいおりはしらかおも  
面八句を庵の柱に懸け置く。

## <口語（現代語訳）>

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやってくる年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを

と ろうねん むか ま こ まいにちまいにち たび たび じぶん  
取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のす  
みかとしている。(ふうが みち しょうがい) 昔の人々の中にも、旅の途中  
で死んだ人が多い。私 もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あ  
てのない旅に出たい気持ちが動いてやまず、(きんねん はあちこちの) 海岸をさすら  
い歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに (かえ) 蜘蛛の古巣を払って  
(す 住んでいるうちに)、しだいに年も暮れ、新 春ともなると、霞の立ちこめる  
そら もと しらかわ せき こ がみ の うつ  
空の下で白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移ってただもうそわそ  
わとさせられ、道祖神が招いているようで、何も手につかないほどに落ち着かず、  
ももひき やぶ つくろ どうちゅうがさ つ か さんり きゅう す  
股引の破れたところを繕い、道 中笠のひもを付け替え、三里に灸 を据える(な  
ど旅の支度にかかる) ともう、まつしま がつ うつく  
松島の月 (の 美しさはと、そんなこと) がまず  
気になって、いまま まで す 住んでいた 庵 は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、  
もと そうあん あたら じゅうにん こ わたし す 住んでいた ころ  
元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしさと  
はうって変わり、はな はな ひなにんぎょう かざ  
華やかに雛人形を飾っている。  
おもてはっく かどで きねん いおり はしら か  
面八句を、(門出の記念に) 庵の柱に掛けておいた。

え どじだい か  
江戸時代に書かれた「おくのほそ道」は、にほん だいひょう きこうぶん  
日本を代表する紀行文です。1689  
ねん がつ はじ 150 にち こ だいいょう たいけん けんぶん しる さくしゃ  
年3月から始まった、150日を超える大旅行の体験や見聞を記しています。作者  
のまつおばしゅう え どじだいぜんき はいじん たか げいじゆつせい しょうふうはいかい そうし  
松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳人で、高い芸術性をもった蕉風俳諧を創始し  
ました。

ところで、「俳諧」「俳句」といえば、かけ ひゃくえん おも う よしみす  
加計の「百句苑」が思い浮かびます。「吉水  
えん ちか ひゃくえん はいく よ ていえん せいび か け いにしえびと よ  
園」近くの「百句苑」は俳句を読む庭園として整備され、加計の古 人が詠んだ  
く せきひ きざ じもとか けしょうがっこう はいく そうさくかつどう さか  
句が石碑に刻まれています。また、地元加計小学校では、俳句の創作活動が盛  
んで、こうりゅう かい けしょうひゃくえん せっち ひび せいかつ しぜん うつ  
交流ホールに「加計小百句苑」を設置して、日々の生活や自然の移ろい  
を題材にこどもたちが詠んだ句を展示しています。さらに、ことし こ いち  
今年、今年五サー市では、らいじょうしゃ はいく よ く あつ きかく しゅうねんはいく  
来場者に俳句を詠んでもらい150句を集めるといふ企画「150周年俳句チャ  
レンジ」を見事に成功させてくれました。

きょういくいいんかい であんどう たし あ き おおたちょう はいく  
教育委員会としてもこの伝統をより確かなものにし、安芸太田町を「俳句」  
のまち として 発展させていきたいと かんが 考えています。皆さんのご理解とご協力  
を ねが お願いします。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 さくしゃ じんせいかん もっと しめ いちぶん こぶんちゅう ぬ だ  
作者の人生観を最もはっきり示している一文を古文中から抜き出し、  
はじめの五字を書きましょう。
- 2 なみかせんぶ ひびたび たび  
波下線部「日々旅にして旅をすみか」とありますが、このように暮  
らしているのはどのような職業の人だと述べていますか。現代語訳中  
から見つけて二つ書きましょう。
- 3 たび で さそ きもち ついくもち ひょうげん ぶぶん こぶん  
旅に出たいと誘われる気持ちを対句を用いて表現している部分を古文  
中から抜き出し、初めと終わりの三字を書きましょう。
- 4 なみかせんぶ くさ こも すみか はるよ ひな いえ  
波下線部「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」について、この俳句の季語・  
季節・切れ字を書きましょう。

かいどうれい  
< 解答例 >

- 1 つきひ はくたい 2 せんとう まご 3 そそろ〜つかず
- 4 ひな はる 雛・春・ぞ

令和7（2025）年度1月「歳時記」

謹んで新年のご挨拶を申し上げます

旧年中は格別のご厚情を賜り、誠にありがとうございました

安芸太田町教育委員会ホームページ「歳時記」は、皆様のご期待に添えるよ

う、より一層の努力を重ねてまいります

本年も変わらぬご愛顧のほど、よろしくお願ひ申し上げます

皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます

令和8年 元旦

1月は新しい年の始まり。元日の「初日の出」や「初詣」で一年の幸せを祈り、7日の「七草がゆ」で無病息災を願ひ、11日の「鏡開き」でお餅を味わいます。「成人の日」を中心に新成人を祝う会が開かれ、家族や地域で門出を応援します。宮中では「歌会始」が行われ、同じ題で詠んだ和歌が披露されます。自然と人の願ひ、ことばの文化が調和する、静かで豊かな月です。今月は「歌会始」にちなんで「古今和歌集」仮名序、中学校3年生の学習内容です。

<古文>

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。

世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出せるなり。

花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、男女のなかをも和らげ、猛き武士の心をも、慰むるは歌なり。

<口語（現代語訳）>

やまとうたは、人の心を種として、（そこから芽生えて）種々さまざまの葉になったものだ。

この世の中に生きている人々は、さまざまな出来事に関わっているので、心に思うことを、見るもの、聞くものに託して、言い表わしたのである。

花の間に鳴く鶯、清流にすむ河鹿の声を聞くと、生きている全てのものの、どれが歌を詠まないといえるだろうか。

力ひとつ入れずに天地の神々の心を動かし、目に見えないもろもろの精霊たちをしみじみとさせ、男女の仲を親しいものとし、勇猛な武人の心をも、和らげるのが歌なのである。

「仮名序」は、「古今和歌集」の仮名で書かれた序文で紀貫之が書いたとされています。冒頭には、「和歌」とはどのようなものであるかが植物の種と葉にたとえて述べられています。声に出して読むことで、古文の言葉の響きを味わうことができるでしょう。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

1 「仮名序」は、何の序文として書かれたものですか。また、誰によって書かれたとされていますか。それぞれ漢字で書きましょう。

2 波下線部「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。」とありますが、ここでは、植物の葉と種をそれぞれ何にたとえていますか、書きましょう。

3 波下線部「いづれか歌をよまざりける。」で用いられている決まりを何というか、書きましょう。

4 次の空欄に入る言葉をそれぞれ二字で書きましょう。

この文章では、前半で和歌の(①)を、後半では和歌の(②)を述べている。

かいとうれい  
<解答例>

- 1 ここんわかしゅう 古今和歌集 ・ きのつらゆき 紀貫之
- 2 <葉>やまとうた <種>人の心
- 3 係り結び
- 4 ①本質 ②効用

あ き おおたちょうきょういくいいんかい 安芸太田町教育委員会 きょういくちょう 教育長 おおの まさと 大野 正人

令和7（2025）年度2月「歳時記」

2月は、厳しい寒さの底にありながら、春の息吹がほのかに立ちのぼる季節です。梅は凜とした香りを放ち、紅白の花が枝先にほころび、冬空に静かな彩りを添えます。鳥たちは日脚の伸びを感じてさえずりを増し、川辺では早春の光を受けて水鳥が羽を休めています。風は冷たさの中に柔らかさを含み、季節の移ろいを告げるように頬をかすめ、月は澄み切った夜空に冴え冴えと輝き、静寂の美を際立たせます。自然が少しずつ動き出す「如月」は、やがて訪れる春への期待を胸に抱かせる時期でもあります。そうして心は、凧いだ海に舞う一陣の風がひらりと扇を揺らした、平家物語「扇の的」の場面へと導かれていきます。

<古文>

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。」

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなうたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさうとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だした

るが、白波の上に漂ひ、浮きぬしづみぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

<口語（現代語訳）>

時は二月十八日、午後六時頃のことであったが、折から北風が激しく吹いて、岸を打つ波も高かった。舟は、揺り上げられ揺り落とされ上下に漂っているの、さおの先の扇もそれにつれて動きを止めず、ひらひらと揺れている。沖には平家が、舟を海上一面に並べて見物している。陸では源氏が、馬のくつわを並べてこれを見守っている。どちらを見ても、まことに晴れがましくないということはない。与一は目を閉じて、

「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真ん中を射させてください。これを射損じれば、弓を折り、自害して、再び人に顔を合わせるつもりはありません。いま一度故郷へ帰そうとお思いでしたら、この矢を外させないてください。」

と心に念じながら、目をかっと見開くと、風も少し弱まり、的の扇も（揺れが静まって）射やすくなっていたのだ。

与一は、かぶら矢を取ってつがえ、十分に引き絞ってひょうと放った。小柄なので、矢は十二束三伏だが、弓は強い、かぶら矢は、浦一帯に鳴り響くほど長いなりを立てて、誤ることなく扇の要から一寸ほど離れた所をひいふつと射切った。かぶら矢は海へ落ち、扇は空へと舞い上がった。しばしの間空に舞っていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさっと散り落ちた。夕日が輝く中に、金の日輪を描いた真っ赤な扇が白い波の上に漂って、浮きつしづみつ揺れているのを、沖では平家が、舟端をたたいて感嘆し、陸では源氏が、えびらをたたいてはやし立てた。

情景描写の迫力と緊張感が見事で、与一の祈りから放射の瞬間、扇が舞い落ちるまでの流れが鮮やかに心に迫ります。平家、源氏双方の様子も臨場感を高め、名場面としての魅力が凝縮されています。

皆さんは、どのような情景を心のキャンバスに描きましたか。そして、登場

じんぶつ げんどう あらわ みかた かんが かた とら  
人物の言動に表れたものの見方や考え方をいかに捉えられたでしょうか。

れんしゅうもんだい みな  
それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- なみか せんぶ くが げんじ なら み ついく  
1 波下線部「陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。」と対句になっ  
ている部分を、古文中から抜き出して書きましょう。
- おうぎ い よいち つよ かくご あらわ いちぶん こぶんちゅう  
2 扇を射ることへの与一の強い覚悟が表れている一文を、古文中の  
与一の言葉から抜き出し、初めの五字を書きましょう。
- なみか せんぶ ひょうど ぎおんご まと や いき おと あらわ  
3 波下線部「ひやうど」は擬音語ですが、的を矢が射切った音を表して  
いる擬音語を、古文中から四字で抜き出して書きましょう。
- なみか せんぶ ち ち なん こぶんちゅう  
4 波下線部「散つたりける」とありますが、散ったのは何ですか。古文中  
から一字で抜き出して書きましょう。
- うみ お おうぎ ようす しきさい たいひ いんしやうてき えが ぶんぶん  
5 海に落ちた扇の様子が、色彩の対比で印象的に描かれている部分を  
四十六字で抜き出し、初めの五字を書きましょう。

かいとうれい  
< 解答例 >

- おき へいけ らね いちめん なら けんぶつ  
1 沖には平家、舟を一面に並べて見物す。      2 これを射損
- ひいふう      3 扇      4 夕日のかか

あ き おおたちやうきやういくいいんかい きやういくちやう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人

令和7（2025）年度3月「歳時記」

3月は、春の訪れを告げる「啓蟄」に始まり、やがて「春分」を迎える季節です。大地がぬくもりを取り戻し、冬は土の中で眠っていた虫たちが目を覚まし、活動を始める様子に、自然の息吹を感じます。梅の花がほころび、やがて桜がつぼみを膨らませる頃、野山には菜の花やふきのとうが顔を出し、春の彩りを添えます。日ごとに日差しが柔らかくなり、空気もどこか甘やかな香りが漂い始めるこの時期は、心も軽やかになります。年度の節目でもある3月は、別れの時期でもあります。新たな門出に向けて、自然とともに歩みを進める季節の移ろいを、心静かに味わいたいものです。今回は、別れの季節3月にふさわしい漢詩、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を紹介し、中学2年生の学習内容です。

＜書き下し文＞

故人西のかた黄鶴楼を辞し  
烟花三月揚州に下る  
孤帆の遠影碧空に尽き  
唯だ見る長江の天際に流るるを

＜白文＞ \*読み仮名はありません

故人西辞黄鶴楼  
烟花三月下揚州  
孤帆遠影碧空尽  
唯見長江天際流

黄鶴楼は武昌の町にあります。長江を見下ろすこの楼の上で、李白は友人の孟浩然を見送りました。就職の手がかりを求めての旅だったと言われています。孟浩然はここから揚州（広陵）へ向かいます。

「故人」とは古くからの親友のこと。友は、西にある黄鶴楼に別れを告げ、春

がすみ た がつ らね ようしゅう くだ えんか はるがすみ いみ  
霞の立ちこめる3月、舟で揚州へと下っていきます。「煙花」は春霞を意味し、  
きゅうれき がつ ばんしゅん ようしゅう ちようこうかりゅう はんか みやこ  
旧暦の3月は晩春にあたります。揚州は長江下流の繁華な都です。

し ぜんはん はる はな じょうけい えが こうはん いったん もうこうねん  
詩の前半では、春の華やかな情景が描かれますが、後半では一転して、孟浩然  
こどく すがた う かび あ ひろ ちようこう う かび ほ か ぶね しろ  
の孤独な姿が浮かび上がります。広い長江にぼつんと浮かぶ帆掛け舟。その白  
い帆がゆっくりと遠ざかり、李白は黄鶴楼の上からいつまでも見送ります。やが  
て白帆は青空のかなたに消え、残るのは天際まで続く長江の流れだけ。こう詠  
むことで、別れの悲しみは尽きることなく、静かに心に漂い続けるのです。

れんしゅうもんだい みな  
それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 この漢詩の形式を、漢字で書きましょう。
- 2 波下線部「故人」について書いた次の文章の空欄にあてはまる言葉を  
書きましょう。  
「故人」とは、(①) という意味で、ここでは(②) のことです。(②)  
は、(③) から(④) へ向かいます。
- 3 第4句で用いられている表現技法は何ですか。漢字で書きましょう。

かいどうれい  
< 解答例 >

- 1 七言絶句
- 2 ①古くからの友人 ②孟浩然 ③黄鶴楼 ④揚州 (広陵)
- 3 倒置